

<今をとらえる>

私の研究の原点

豊福裕二

アメリカの住宅産業及び住宅問題の研究を専門領域として10年ほどになります。昨年度末に、これまでの研究成果を「米国住宅産業の成立と展開」というテーマで博士論文にまとめることができました。しかし、ここに辿り着くまでにはさまざまな紆余曲折がありました。

そもそも私が研究者を志した当初、専門的に研究したいと考えていたのは日本のバブル経済の問題でした。現代資本主義における擬制資本市場の肥大化の意味を理論的に解明したいというのが当時の問題意識でしたが、その根底には、次のような学部生時代の素朴な実体験がありました。

私が京都大学に入学したのは1989年ですが、翌年の1990年に、両親が仕事の都合で岡山から大阪に転勤することになりました。実家には15年近く飼っている愛犬がいたので、当然庭付きの戸建て借家を探すことになりましたが、時はバブルの絶頂期で、手ごろな物件は容易には見つかりませんでした。私も何度か母に同行して家探しをしましたが、不便な郊外の物件がほとんどで、鉄道駅以外に何もない郊外の新興住宅地を訪れた時は、そこに日中取り残される寂しさを想像して陰鬱な気分になりました。家探しが難航するなかで、一時は愛犬を手放してマンションに住むという選択肢まで出て、ひどく落ち込んだのを覚えています。結果的には、経済的にやや無理をして庭付き戸建てに住むことになり、愛犬も手放さずに済んだのですが、この時の

経験は、私がバブル経済の矛盾を強く意識するきっかけとなりました。

このような問題意識から、修士論文のテーマとして私が選んだのは、「アメリカの土地市場と不動産の証券化」というものでした。バブル経済の日米比較を念頭に、証券化という金融市場の最新の動向が土地価格に与える影響を考察したいと考えたからです。しかし、日本のような全国的な地価統計がアメリカにはないなど、資料収集に行き詰まり、結局、修士論文では60～70年代における住宅金融の証券化の動向をまとめるにとどまりました。以後、資料の制約もあって、私の研究対象は住宅金融から住宅産業へと移っていき、また時代も60～70年代にとどまるなど、当初の問題意識からはかなり遠ざかる結果となりました。いくつかの論文をまとめつつも、研究の方向性は常に模索している状態でした。

その意味では、今回の博士論文で、曲がりなりにも90年代論へと研究を進め、当初の住宅金融の研究と住宅産業論との接点を見出せたことに、私としては一定の手ごたえを感じています。現在、アメリカの住宅市場が再びバブル的様相を呈するもとで、その反省を抜きに、日本ではアメリカをモデルとした住宅政策の改革が進行しようとしています。アメリカの住宅市場の構造を明らかにすることが何よりも求められていますが、私の研究成果はその端緒にすぎません。「あらゆる社会的生活の基盤であるはずの住宅の取得に、なぜ庶民がこれほどの負担を強いられなければならないのか」という素朴な疑問が私の研究の出発点です。この原点に絶えず立ち返りつつ、アメリカの研究をさらに前に進めていきたいと考えています。

(三重大大学)